

しばらく階段を駆け上がると、右手に巨大な開口部があった。

そこには、ヒカリゴケが生えてはいないらしい。闇に包まれていた——「黒き回廊」であろう。ところどころ、赤くちらついている光は、かがり火だろうか？ ほぼまっすぐに緩やかな上り坂になっている。私たちはカケトカゲを進めた。

一イコル（約三十メートル）ほど進んだだろうか、フソリテスとワドワクスに追いついた。彼らはカケトカゲから降り、地図を開いて覗き込んでいた。

「何があつたんですか？」

ドウイータがささやき声で尋ねた。フソリテスは、手で制した。

足音——しかも無数の裸足の足音が、回廊の遙か奥の方からかすかに聞こえた。フソリテスが言った。

「筆が乱れている。『アグロウの洞窟』と読めるが……血の染みでその先が読めぬ」

「『アグロウ』？ 何のことでしょう？」

ドウイータが首をひねった。ふとワドワクスが私を見た。

「ゴルカンさん、怪我をしてるんですか？ 顔色が真っ青だ」

「ヒカリゴケの明かりのせいだろう」

「ここにコケは生えていませんよ。さあ、見せて下さい」

私は不承不承、自分で縛った傷を見せた。

「なんてこった。あなたは、決して医者にはなれませんね」

「なるつもりもない」

ワドワクスは、おもむろに懷から小さな革袋を取り出した。そのなかから、干した薬草らしきものを摺み出すと、私の腕の傷に刷り込んだ。ひどく沁みて、顔をしかめた。

「リリローの花を干したものです。血止めの薬になります」

「用意がいいな」

「言つたでしょう。僕は剣を遣えないが、頭は使える、と。何と言いましたか、天幕で炊事の仕事をしていた女の子にお礼を言うんですね」

「フィエル？」

私は驚いた。

「ずいぶんとゴルカンさんのことを心配してました。彼女が持たせてくれたんですよ。ゴルカンさん自身は決して自分では受け取らないだろうから、って。この花、今は青色ですが、血を吸うと真っ黒になります。そうしたら塗り直しますから、言つて下さい」

「わかった。ありがとう」

小休止の後、私たちはそこへカケトカゲを置いていくことにした。私たちは、岩の突起に手綱を巻き付けた。

「フィンク、しばらくおとなしくしていてくれ。必ず、戻ってくる」

フィンクの鼻面の鱗を撫でてやると、フィンクは喉の奥を鳴らした。

私たちは前進を再開した。

進むに連れて、裸足の足音がより鮮明に聞こえてきた。しかし、人語は聞こえない。

徐々に、奥のほうから漏れる青白い光が強まっていた。ムージェルが命を引き替えに描いた地図通り、広い空間があるらしい——「アグロウの洞窟」。

私たちは、足音を息を忍ばせて、「黒き回廊」をゆつくりと進んだ。壁にところどころ架けられた松明の明かりだけでは暗く、何度も転びそうになった。

回廊の末端まで半イコル（約十五メートル）ほどのところで、先頭のフソリテスが歩を止めた。かすかに耳をとらえる音があった。息を殺す。

まぎれもなく、それは人のすすり泣きの声だった。

「子どもたちだ……」

ワドワクスが息を呑んだ。ドゥータが辺りを見回しながら、小声で言う。

「見張りには？ 兵士たちの気配がない。連中の鎧や鎖帷子の音が聞こえるはずじゃない？」

私は、剣の柄をしっかりと握りしめた。抜き放った。三人が、呆気にとられた表情で私を見ている。これ以上、子どもものすすり泣きを聞いていることに耐えられなかった。傷の起こした熱が私の理性を失わせていたのかも知れない。

後先も考えず、「アグロウの洞窟」へ飛び込んでいた。

回廊からは見えなかったが、すぐ右手の奥の岩壁が掘られ、粗末な木製の格子が設

置されていた——牢獄。二部屋あつたが、奥の牢屋は空のようだった。手前の部屋には、簡単でちやちな錠前が取り付けられている。ちょうど、私とワドワクスが囚われていた牢獄とほぼ同じ作りになっている。

内部を覗き込んだ。暗がりの中に、小さな影が三つ、見てとれた。二人は小人族オゼットであろう。

子どもだ。痩せ細り、眼ばかりをぎらぎらとさせていた。

私が剣を振り上げると、三つの小さな影は息を呑んで身を寄せ合つた。

「心配しなくていい」

私はささやき、剣の柄を錠前に叩き付けた。大きな音を立てて、錠前が壊れた。

「ゴルカンさん……ゴルカンさんなの？」

一人が言った。

「トレアンダ？ 無事だったか！」

「ゴルカンさん！」

トレアンダは私の胸に飛び込んできた。私はしっかりとその小さな体を抱きしめた。

「よくがんばった。よく、生きていてくれた。怪我はないか？」

「うん、大丈夫だよ。ぼく、泣かなかつた。絶対に泣かなかつたからね」

「よし、さすがは大賢人ヒジー殿の弟子だ」

私は剣を鞘に収め、トレアンダの頭を撫でた。ドウィータとワドワクス、フソリテスも牢獄の暗がりへ駆け込んで来た。ドウィータは、二人の子どもを胸にかき抱いた。

「もうみんな大丈夫！ 怖い思いをしたのね」

「トレアンダ君！ 無事だったのか！」

ワドワクスがトレアンダの手を握りしめた。

「あなたが探してた子？」

ドウィータが尋ねた。ワドワクスは潤んだ眼でうなずき、彼女に尋ね返した。

「ジエク君は……どこに？」

「ジエク君は、いないみたい……」

ドウィータが一人ごちた。ワドワクスはトレアンダに向き直つた。

「トレアンダ君、やつらにひどいことはされなかつた？」

「うん。ぼくは平気。でも、こつちのイサーダは……くそつ……でつかい兵隊に襲わ

れたんだ。ひどいことされて、それで、口が利けなくなっちゃって……」

トレアンダが、我がことのように怒りの表情を見せ、声を震わせた。

イサーダと呼ばれた子どもは、年の頃、十二、三歳くらいの小人族オゼットの少女だった。ドウイータに抱かれていても、その体の震えは止まらず、表情も硬くこわばったままだった。

「お姉ちゃんは？ ご家族は見つかったの？」

ワドワクスが尋ねると、トレアンダ少年はかぶりを振った。

「父ちゃんと母ちゃんは……たぶん……駄目だと……思う……」

そして、胸の奥底から絞り出すような声だった。

「亡くなった……？ なぜ？ まだそうと決まったわけじゃあ……」

「剣を持った人たちが、小人族は用なしだから、子ども以外は皆殺しだって……」

絶句するワドワクスのあとを引き取って、私が尋ねた。

「お姉ちゃんは、無事かも知れないんだね。きみたちの他に、子どもたちは？」

「わからない。見かけたことがないんだ」

トレアンダは歯を食いしばった。

「俺、あるぜ」

今まで黙っていた大人族コデイックの少年の一人が声を上げた。この三人のなかではおそらくもっとも年嵩だろう。すでに声変わりしている。浅黒い肌をした、勝ち気な顔つきの少年だ。

「俺が連れてこられたとき、隣の牢屋には何人かいたよ。女の子もいたと思う」

「お姉ちゃんだ、きつと。どうしてもっと早く教えてくれなかったんだよ、ネストン！」

トレアンダが声を上げた。

「だって、おまえ、訊かなかったじゃないか」

ネストンと呼ばれた少年が口をとがらせた。

「そこにジェクがいた可能性があるわね」

ドウイータが言った。私はうなずき、ネストンへの質問を続けた。

「隣の牢屋の子どもたちがどうなったか、きみは知っているの？」

私は尋ねた。

「毎日一回、いちばん偉い人がやって来て、一人ずつ牢屋から出して、洞窟の奥に連

れてつたんだ。やつら、『なんとかの儀』って言ってた。噂、聞いたんだ……」

「どんな噂だね?」

私が尋ねると、ネストンは言いにくそうな表情になった。

「噂だけ、ほんとのことはわかんねえ。でも、聞いたんだ。この洞窟の一番奥は、水晶山の頂上につながって、そこに……大蛇がいるんだ」

私のかたわらで、フソリテスが息を呑むのがわかった。ネストンは続けた。

「大蛇に、子どもは生け贄として捧げられるんだ。心の臓を抜かれて、大蛇に食べられちまうんだって。俺たちは騙されたんだ。〈蛟漿〉こうじょうなんて、もらえつこないし、不老不死になんかなねえんだ。大蛇は俺たちを餌にして、世界を滅ぼそうとしているんだ! 畜生、おやじもおふくろも、大馬鹿だ! そんなでたらめを信じて……」

「それは違うぞ、ネストンとやら」

フソリテスの声は、不思議と人の波立つた心を静める響きがあった。

「〈大くちなわ様〉——きみの言う大蛇だが——は、生け贄など求めていない。そなたの言う〈蛟漿〉なども、この世に存在しない。そなたたちをたばかったのは、マトスという一人の邪悪な男だ。〈大くちなわ様〉も、そんなことを望んではおらん」

「あんたは……なんでそんなに詳しいんだい?」

代わりに私が答えた。

「こちらはフソリテス様。おそらくこの地上でいちばん大蛇にお詳しい方だ。マトスは……きみが言った『いちばん偉い人』は、生け贄ではなく〈抛代〉よりしろという子どもを探しているんだ。大蛇の言葉を理解し、我々人に伝えることのできる子どもを」

「じゃあ……見つけたのかな……」

ネストンがつぶやいた。ドゥイータが勢い込んで尋ねた。

「どういうこと、見つけた、というの?」

「いつだったかわかんねえけど……ちやうど、イサーダとトレアンダが連れて来られるちよつと前だったと思う。もういちばん偉い人が来なくなったんだ。それっきり、俺とかイサーダやトレアンダは、ここで置き去りさ」

「〈抛代〉よりしろに選ばれなかった子どもたちは……」

言いかけて、ワドワクスは慌てて口をつぐんだ。それ以上を考えたくないのは、我々みな同じだった。

「じゃあ、お姉ちゃんは、もしかして……」

はじめてトレアンダの眼に涙が浮かんだ。

そのとき、フソリテスが静かに言った。

「望みを捨てることは、自らを殺すこと。トレアンダと言ったかね、坊や。そなたは生きている。生きている者の務めは、生き抜くこと、ただそれ自体。そして、生き抜くとは、畢竟、一縷の望みを胸に抱き続けること。おっと、小難しい話だったかな」

「おじさんは？　まるで、ヒジーみたい」

私が代わりに答えた。

「ヒジー殿と同じく、賢きお方だ。さあ、涙を拭くんだ、トレアンダ。誰であれ、もしも〈抛代〉が見つかったのなら、もう猶予はない。今、やらなければならぬことを、今すぐにやる。それは、泣くことじゃない。泣くのはあとでもできる。わかるね？」

私が言うのと、トレアンダはうなずいた。

「しまった、忘れてた！」

ネストンが声を上げた。

「どうした？」

「一日に一度、でっかい体の兵士が、食事を持ってくるんだ。腐りかけたパンだけど。

たぶん、もうじきその時間——」

彼が言い終えるか否や、足音が近づいてきた。振り返った。

男と眼があった。私よりは頭二つ分は背が高く、でっぷり太った巨漢だった。鋼の鎧を着込んでいるが、兜は着けていない。手には金属製の皿を持っていた。寄せ集めの傭い兵ではない、マトスの護衛だ。

動くのは、私のほうが早かった。

剣を抜き放った。突進した。

巨漢の兵は、驚愕の表情で皿を取り落とした。が、一瞬遅れて、長い剣に手をやった。

振り下ろした。思いもかけず、敵の力は強かった。いや、怪我のせいで私の力が弱っていたのだろう。刃をはじき返された。第二撃。同様に薙ぎ払われた。十エーム（約三メートル）もはじき飛ばされた。地面に背中から落ちた。激痛が背骨から脳天まで走る。

「ゴルカンさん！」

トレアンダの悲鳴。

次の瞬間だった。甲高く、耳障りな高音が洞窟全体に響き渡った。巨漢の兵士が、小さな呼び子を吹いていた。

「追っ手が来るぞ！」

フソリテスが剣を構えた。

十数える間もなく、洞窟の奥から激しい足音が近づいてきた。

私は起きあがった。剣を拾った。一挙手一投足に激痛が走る。よろめきながら、巨漢に突進した。呼び子を吹く巨漢の背中、鎧の隙間に、柄まで剣を突き刺した。

剣を引き抜く。巨漢が地響きを立てて倒れた。

その刹那、鬨の声を聞いた。顔を上げる。十名あまりの兵が突進してくるのが見えた。兵士たちは、巨漢と同様、揃いの皮の鎧を身に着けた重装備だった。

ドウィータとフソリテスも剣を手に、彼らに向かって突っ込んで行った。

激しい斬り合いになった。三人目を斬ったときだった。異様な臭気に気が付いた。ざわざわという、裸足の足音。

「アグロウ……」

私はつぶやいた。

どこから現れたのか、いつの間にか、私たちは取り囲まれていた。無数のアグロウ

——人喰い鬼に。「しゅう、しゅう」という激しい息づかい。鼻を突く悪臭。薄緑色の肌に黄色い歯。醜くねじくれた鉤爪。人喰い鬼どもが、無数に私たちを遠巻きにしていた。

ワドワクスが、必死に三人の子どもを抱きしめている。

兵士たちの顔に、いやらしい笑みが浮かんでいた。もはや、我々は人喰い鬼の餌食になる他ないのか。

そのとき、一つの影が歩み出て来るのが見えた。一人だけ、黒い長衣を身に着けている。一瞬、マトスカと思った。が、そうではなかった。もつと若い男だった。色白で、端正な顔立ちをしている。首からは、拳より大きな暗緑色の丸石をいくつもつけた首飾り——

「呪技遣い………?」

ドウィータが息を呑んだ。

兵士の一人がにやり、と笑い、呪技遣いに向かって言った。

「先生よ、俺たち、ずっとガキどものお守りばかりで、暇で暇でかなわんだ。一つ、余興でも見せてくれんか」

「いいでしょう」

若い呪技遣いは無表情のまま、丸石の一つを掲げた。そして、私たちに言った。

「あなたたちですね、エクウムの宿で私の同輩を殺したのは」

「遠くから盗み見する程度の呪技は、あんたにも使えるようだな」

私の皮肉にも動じた様子はなく、呪技遣いは静かに言った。

「ではどんな呪技が使えるか、とくとご覧なさい。バキヤス・ドウラア」

呪文を唱えるや否や、私たちの回りを炎の輪が取り囲んだ。

兵士たちの哄笑。その向こうでは、アグロウたちが、遠ざかって行くのが見えた。どうやらアグロウという輩は炎が苦手らしい。

炎の輪は、じりじりとその直径を縮めていた。ドウィータの着ていた長衣の裾に火が付き、彼女は慌てて叩き消した。それを見ていた兵士たちは、げらげらと笑い出した。

呪技遣いは相変わらず無表情のまま、新たな呪文を唱えた。

「ジールフ・エキル・セイ！」

次の瞬間、私の体が動かなくなった。まるで見えない紐で全身を縛り上げられているようだった。呼吸さえも苦しい。フソリテスやドウィータ、ワドワクスや子どもたちにも、同じ呪技がかけられたらしい。

そのときになって、はじめて若い呪技遣いが冷たく微笑んだ。

彼はゆつくりと歩み寄ってきた。

「テインバル・バキヤス」

我々の回りの炎の輪が、一瞬で消え去った。が、体はいまだに動かない。

呪技遣いは我々に近づいてきた。その眼はドウィータをじつと見ている。

「うつくしい。そなたには、物騒な武器は似合いません。ムラシッド！」

呪技遣いの呪文と同時に、ドウィータの剣が、地面に落ちた。ドウィータは、怒りと屈辱の入り交じった表情で、呪技遣いを凝視している。

ドウィータの体は、操り人形のように呪技遣いととも、歩き始めた。

「や、やめろ……」

かろうじて、ワドワクスが言った。が、次の瞬間、呪技遣いが手をかざした。ワドワクスは、がくり、と地面に膝をついた。

呪技遣いは、我々を一瞥すると、片手でドウィータの頬を撫でた。彼女は嫌悪の表情で呪技遣いをにらみつけたが、呪技遣いは動じた様子を見せず、兵たちに言った。

「この娘は差し上げましょう。その前に、お毒味を……」

兵士たちの間から、嬌声が上がった。呪技遣いは、ゆつくりとドウィータの顔に、自分の顔を近づけた。ドウィータは抗うことができずにいた。兵士たちの大きな嬌声。

呪技遣いが、ドウィータの唇を奪った。

と、次の刹那、呪技遣いは苦痛に絶叫していた——その口元から血が吹き出している。

ドウィータが、呪技遣いの唇を噛み切ったのだった。

同時に、我々にかけてられていた呪技も解けた。

呪技遣いは体を丸め、子どものように泣き叫びながら地面をのたうち回った。

ドウィータは、噛み切った肉片を、そんな呪技遣いに向かって吐き出した。

兵士たちも、何が起こったのかようやく気づいた。武器を構え、うずくまる呪技遣いを飛び越えると、我々に向かって走り出して来た。

「ドウィータ！」

私は彼女の剣を拾い、彼女に向かって放った。

彼女は受け取った。一瞬後、彼女の剣が一閃した。一人の兵の首が飛んだ。返す刃でもう一人の胸を払った。振り向くこともせず、背後の兵に切っ先を突き立てる。

私も剣を構え、一人残った備い兵の首を刎ねた。

ワドワクスと子どもたちが、アグロウに取り囲まれていた。フソリテスが剣を振るい、必死に防戦している。私も応戦に向かった。剣を一振りすることに、一匹のアグロウを殺した。しかし、斬っても斬っても、次から次へ、無数のアグロウたちが群がって来る。

そのとき、甲高い声が聞こえた。

呪技遣いが立ち上がっている。口元からとめどなく血を流しながら、暗緑色の丸石

をかざしていた。その眼は、狂気の色をたたえていた。

「ムウシペス・ムウリメエ！」

ほとんど絶叫するように、呪技遣いは呪文を唱えた。

丸石から、まばゆい緑色の閃光が真一文字に発射された。閃光は天井に当たり、岩が崩れ落ちてきた。アグロウたちは、恐怖の咆哮を上げ、壁際へと逃げ出そうとした。

「ムウシペス・ムウリメエ！」

再び呪文——緑色の閃光。私は地面に転がった。かろうじて、閃光は私の体をそれた。が、その閃光は二十四匹あまりのアグロウたちを一瞬で焼き払い、岩壁に命中した。すさまじい音を立てて、天井から大小の岩が落下し始めた。

私は、肩に掛けた弩弓を下ろした。

矢をつがえた。構えた。

呪技遣いが、ゆつくりと私を向いた。その形相は、もはや獣のそれに近かった。もはやその双眸に知恵の光など感じられない。呪技遣いは震える手で丸石をかざした。そして、丸石を持っていないほうの手で、私を指さした。

「灰と消えるがいい！ ピエフォ・レプス・アトゥルー・スルフシュ！」

「消えるのは、おまえだ」

引き金を引く——と同時に、巨大な電撃。

矢が、灰色の呪技遣いの眉間をぶち抜いた。

呪技の雷は、私の背後の壁に命中し、激しく炸裂した。まばゆい閃光が、ほんの刹那、周囲に広がった。衝撃で私は牢屋のほうへ吹っ飛ばされた。激しい土埃。轟音とともに、無数の岩々と土煙が降り注いでくる。何も見えなくなった。意識が遠のく。抱き起こされる感覚があった。苦勞して、眼を開いた。ドゥイータだった。

「生きてるっ。」

「おそらくは」

「フソリテス様は大丈夫。ワドワクスも、子どもたちをしつかり守ってくれた。子どもたちには、怪我一つないわ。人喰い鬼たちは逃げて行った」

「そうか……」

「いつも自分一人の力で何もかも解決できると思ってる。四年前と変わらないのね」
そのとき、気が付いた。はじめて、彼女は私に向かって笑みを見せていた。

「大丈夫ですか？」

ワドワクスが駆け寄ってきた。

「かろうじて生きてる。しかし……あれを……」

ワドワクスは、私が指さした方向を向いた。

「黒き回廊」につながる開口部が、崩れ落ちてきた岩で完全にふさがれていた。

「ああ、なんてこと……!」

ドウイータが絶句した。

フソリテスも、三人の子どもを長衣で包むようにして、歩み寄ってきた。

「ゴルカン、ひどい顔をしているぞ」

「お互い様ですよ。みんな、死に損ないの顔です」

フソリテスは、岩で覆い尽くされた「黒き回廊」の開口部を見やった。

「もはや、後戻りはできません、ということだな」

「もとより、そのつもりはありません」

ドウイータが言った。

「地図によれば、この辺りから、まだ水晶山の奥へつながってるはずだが……」

フソリテスが渋面を作った。

「大蛇がいるという、かつての火口ですね」

ワドワクスは勢い込んで言った。

私は少しの間、思索した。我々は四人。そして、三人の子ども。そしてこの先には無数のアグロウと傭兵、そしてマトスと大蛇――

私は言った。

「ワドワクス、あんたはここに残ってくれ。子どもたちを守るんだ。私たちは、できるだけ人喰い鬼から隠れながら、頂上の火口を目指す。そして、マトスを討つ」

「馬鹿なことを言わないで下さい！ 僕が足手まといだと言っんですか？ 怪我を負ったあなたのほうが足手まといだ」

ワドワクスが語気を荒げた。

「ワドワクスの言う通りよ」

すかさず言ったのは、ドウイータだった。彼女は、静かに私を見つめていた。

「今のあなたはただの怪我人。連れて行くことは、わたしたちの危険を増すだけ」

追い討ちを掛けるようにワドワクスが言った。

「ゴルカンさん、その体で人喰い鬼や兵士どもと闘えるとお思いですか？ ドウイータの前だからといって、意地を張るのはやめて下さい」

私は、一瞬、彼の言っている意味がわからなかった。ようやくその意味を把握しかけたとき、すでに三人は牢獄から出て行くようとしていた。

不意にワドワクスが立ち止まり、私のもとへ戻ってきた。懐から革袋を取り出す。

「例の薬草です。塗り直した方がいいでしょう。あと何回か使う分はあります」

「ありがとう」

私は礼を言っとうなずき、フィエルから託された薬草の小袋を受け取った。

ドウイータが、私を振り返った。

「必ず戻ってくるわ。子どもたちをお願い」

「わかった」

三人が、歩き始めた。すぐに、その姿が闇の中に消えた——マトスと大蛇の待つ山頂へ。

17

重苦しい沈黙が、冷えた洞窟に充滿していた。

辺り一面に、焼け焦げたり斬り捨てられた兵士とアグロウの屍体が転がっている。その数は夥しく、数えきれないほどだった。血と焦げた肉の臭気が鼻孔を衝く。

私は、三人の子どもたちをできるだけ屍体の山から離れた、広間の一角へ移動させた。

新たに兵士やアグロウたちが現れる気配はない。異様な静けさだった。

「寒くないか？」

私は尋ねた。

トレアンダとネストーンは、かぶりを振った。しかし、イサーダという名の少女は、かすかに体を震わせていた。私は血と土埃で汚れた上衣を脱ぎ、イサーダの肩にかけてやった。

「汚くてごめん。ここから出られたら、暖かい毛布と美味しい食事を約束するよ」

彼女は無反応だった。

「寒くて震えてるわけじゃねえんだ。怖いんだ」

ネストンがうつむいたまま言った。

「だって、あんな目に遭ったんだから……」

トレアンダが言い淀んだ。いつの間にか、その両眼に涙がにじんでいた。

ネストンが、唐突に顔を上げた。

「絶対に許さねえ。こんな小さな子に、あんなことしやがって……」

「それ以上、言わなくていい」

私は遮った。

「腐った大人たちには、我々大人たちが必ず罰を与える」

「でも、悔しいよ。ずっとここでワドワクスさんたちを待ってるの？ ぼくたちも、

イサーダの復讐をしたいよ。自分の手で姉ちゃんを見つきたいよ」

トレアンダが言うのと、ネストンが小石を掴み、壁に向かって投げつけた。

「くそつ、俺たち、何もできねえのかよ！」

私は、ネストンが小石を投げた岩壁を見つめた。そのまま、視線を岩の天井へ上げた。

「アグロウ……」

私はつぶやいた。

「何？ 人喰い鬼がまた出たの？」

トレアンダが、ややおびえた声を上げた。

「いや……やつらは、あつという間に現れ、そして生き残りもまた、すぐさまどこかに消え去った。傭兵兵のように、回廊の奥から現れたようには思えない」

「そう言えば、そうだ。やつら、どこから来たんだろう？」

ネストンが、私の視線を追った。

「見えるか？」

私は、岩壁の一角を指さした。地面からおよそ二十エーム（約六メートル）ほどの高さに入った縦長の亀裂だった。よく見ると、その亀裂の周囲に、どす黒い血痕らしきものがべったりと付着している。

「あそこから、人喰い鬼が逃げたんだ！ きつと、秘密の通路なんだよ」

トレアンダが叫んだ。

「その先は、アグロウどもがうじゃうじゃいる巢につながっているかも知れねえぜ」
ネストンが言うと、トレアンダは途端に意気消沈した表情になった。

「行ってみる価値はある」

私は言った。

「でも、イサーダが……」

トレアンダが不安げな声を漏らした。

私は左腕の矢の傷を見た。すでに薬草は血をたつぷりと吸って真っ黒に染まっている。まだ痛みはあったが、血は止まっているようだ。私は、薬草をはぎ取り、新たに乾燥した青い花卉を傷口にかぶせ、布きれでしっかりと巻いて縛った。

私は立ち上がり、周囲に散らばる屍体を改め始めた。兵士の屍体の腰帯から、まだ充分に使える短剣を三本見つけ出した。うち一本を自分の腰に収めると、トレアンダとネストンに、一本ずつ差し出した。怪訝そうな顔で、二人の少年は短剣を受け取った。

「ネストン、きみは、イサーダを守ってくれ」

「いや、俺も……」

私は抗弁しようとするネストンを遮った。

「彼女の命を守るのが、きみの使命だ。その剣は、見かけは悪いが刃は充分に研ぎ澄まされている。一突きで、敵を倒せるだけの得物だ。きみなら、イサーダを守れる」

「じゃ、トレアンダは……?」

「それは、彼自身が決めることだ。そうだろうか?」

「う、うん……ぼくは……行くよ」

ためらいがちにトレアンダは答えた。

「覚悟はできているな? 進む道は誤っているかも知れない。それでも、ついてくるか?」

「うん。行くよ。だって、ぼくが行かなきゃ誰がお姉ちゃんを助けられるのさ」

トレアンダが笑ってみせた。私はうなずいた。

「決まりだ」

岩壁を登るのに、トレアンダはさして苦勞しなかった。小人族オセットならではの身軽さで、

岩の突起に掴まり、亀裂まであつという間にたどり着いた。

「わっ、血だらけでひどい匂い！ でも、奥まで続いているみたいだ。青く光ってる」私のほうが、岩壁を這い上がるのに一苦労だった。ネストーンに足を押し上げてもらい、ようやく亀裂にたどり着いた。

間違いない。この奥に、通路が続いている。幅はおよそ二エーム半（約七十五センチ）ほど。全体にうつすらとヒカリゴケが生えており、ぼんやりと青白い光を放っている。足元は、長年に渡って、踏み固められ、削られたらしく、滑らかになっている。高さは、大人の私には低すぎ、中腰でなければ歩けなかった。

私は一度亀裂から外に顔を出し、ネストーンに手を振った。彼も振り返した。そのときだった。イサーダもまた、おそろおそろ私に手を振ってきた。

私はイサーダに微笑みを返した。

そして、亀裂の内部に入った。

アグロウたちの通路は、彼らの独特の不快な臭気と、血の臭いに満たされていた。至る所に血だまりができています。トレアンダも必死に恐怖に耐えているのが伝わってきた。

曲がりくねった通路を、十イコル（三百メートル）ほど進んだだろうか。前方のヒカリゴケの青い光が、よりいつそう明るくなっていた。私たちは歩を早めた。

唐突に、通路は終わった。

眼前に、巨大な円形の空洞が広がっていた。わずかに光で照らされている。

水晶山の山頂——かつて水晶山が生きた火山だった頃の噴火口。

巨大でいびつな楕円形をした口が、頭上にぽっかりと空いていた。小雨が降り注いでいる。いつしか、夜が明けていたのだろう。巨大な口から見える空は、かすかに明るかった。

火口は、直径がおよそ五イコル（約百五十メートル）はあるだろう。底部から、頂までの高さは、およそ二イコル（約六十メートル）。私たちがいるのは、その岩壁のちょうど中腹付近だった。ここが、大蛇のための神殿なのだ。

そして、火口の中央に「それ」はいた。

はじめは、岩の塊のように見えた。しかし、よく見ると、ゆつくりと規則的に動いている——呼吸をしているのだ。

とぐろを巻いた大蛇だった。

その胴の太さだけで、私の体ほどはあるだろう。その全長を確かめることはできない。しかし、少なくとも一イコル（約三十メートル）を超えるのではないか。

その鱗は岩そっくりだったが、よく見るとヒカリゴケのように青く光っている。表面は滑らかで、私のいるところからも鱗の一枚一枚がしっかりと見て取れた。そして、何より異様なのは、その胴体の中央辺り——ちょうど胸と言えばよいか——の左右に生えた、二本の翼だった。今は折りたたまれている。が、真つ黒で、その先に短く鋭い爪の生えたそれは、コウモリの翼そっくりだった。

トレアンダが声を上げそうになったのを、私は手で押さえて制した。

大蛇の前に、紫色の長衣の人影がひざまずいていた。彼を半円形に取り囲むようにして、百名あまりの人々が同様にひざまずいている。大蛇の〈蛟漿こうじょう〉を求めて集まった者たちだろうか。その外側に、鎧を着けた兵士たちが五十名ほど、直立不動で立っていた。さらにその外側に、数百匹ものアグロウたちが、まるでアオバネゴキブリのように蠢いていた。

私とトレアンダは、岩を伝って、ゆっくりと降り始めた。

やがて、下の様子が少しずつ把握できるようになった。とぐろを巻いた大蛇は、ちょうど祭壇のようにしつらえられた、漆黒の岩の上にあった。蛇には目蓋はなかった。だから両眼を見開いているのだが、やはり眠っているのか目覚めているのか判断できなかった。

大蛇の乗る祭壇には装飾などなかったが、それは鏡のように磨き上げられていた。ちょうどフソリテスの塔の屋上のように。

そして祭壇の前、もつとも大蛇に近いところに、小さな人影があった。大蛇に背を向けて立っている。体に合わない大きな紫色の上衣を着せられた人影は、腰の辺りまでの長い黒髪が印象的だ。オゼット小人族だ。眼を閉じ、まるで立ったまま眠っているかのようだった。

「ね、ね、姉ちゃん……!」

トレアンダの顔が見る見るうちにゆがんだ。

「間違いないのか？ きみの、お姉ちゃんなんだね？」

トレアンダは今にも泣き出しそうな面持ちになり、言葉を発せられずにいた。

私はトレアンダの肩にそつと手を置いた。そして、二人して雨に濡れて足場の悪い岩壁を、慎重に、しかしできるだけ素早く降り続けた。トレアンダは身軽に地面に飛び降りた。が、私は無様にも地面に転がり落ちてしまった。剣と鎖帷子が音を立てたが、兵士たちやアグロウどもには気づかれなかったようだ。

駆け出そうとするトレアンダを慌てて止めた。

声が聞こえた。

「エサエルプ・エカウ・イム・イロウ・トゥナイグ・ヘクロネカス！」

神殿であるこの火口全体に、そのかすれた声は響き渡った——マトス。

マトスは、やはり紫色の長衣を着て、銀色の蛇の装飾品を肩から掛けていた。長衣は雨に濡れそぼって、裾からはしずくがしたり落ちていたりしている。

「大くちなわ様」、どうかお目覚め下さい。混沌と邪教のはびこるこの地上に、大くちなわ様」の聖なる吐息をお与え下さい——」

そのときだった。不意に火口内がざわついた。マトスも顔を上げた。

ちようど、私とトレアンダのいる反対側のほうで、複数の人ともみ合う音が聞こえた。そして、うめき声。兵士たちが一斉に剣や槍を構えるのが見えた。アグロウたちが群れたまま、一斉にそちらへ近づいてゆく。

おかげで、私たちの周囲からはアグロウの姿がいなくなった。私とトレアンダは、少しずつ岩陰に隠れながら移動した。

出し抜けに、マトスの笑い声が響き渡った。

「なんと、なんと。滑稽な姿ではないか？」

五、六名の兵士たちに取り囲まれて現れたのは、フソリテス、ドウイータ、そしてワドワクスだった。三人とも、剣を奪われている。さらに醜悪なアグロウたちが二十匹あまり「しゅう、しゅう」を激しい吐息を漏らしながら、彼らを遠巻きにしていた。

「これは可笑しい。実に、滑稽。よくぞここまでたどり着けたものよ、老いぼれよ」

マトスがあざ笑いながらフソリテスに言った。

「笑止千万なのは、こちらだ。貴様の言葉に大くちなわ様」はお答えにならぬ！」

「聖蛇師」に向かつて、よくぞそのような口が利けるものだ。老いには勝てんな、兄者」

「兄者？ わしには、大くちなわ様」を騙る愚かな弟などおらん」

その瞬間、はじめてマトスの声に怒りがにじんだ。

「そうだな……おまえには、いつだって弟などいかなかった。フソリテスの家に、『弟』などいかなかった。《聖蛇師》になれぬ者は、『人』ですらなかった」

「わかっておるではないか、騙りの《聖蛇師》よ。貴様は人ではない。いや、人であることを貴様自らがやめたのだ。堕ちたものだ」

「ええい、黙れ黙れ黙れ！ この者どもをこちらに連れて参れ！」

マトスの命令で、数名の兵士が駆け出した。兵士たちは、フソリテス、ドウィータ、ワドワクスの三人を捕まえ、フソリテスの前まで連行した。三人はひざまずかされた。すぐさま、その背後に槍を持った兵が一人ずつ付いた。

「今、ここで首を刎ねても構わん。が、死ぬ前に面白いものを見せてやろう。この私が《聖蛇師》として、《大くちなわ様》とともにこの世界を駆け巡るその瞬間を！」

しかし、フソリテスは笑い出した。

「《聖蛇師》を騙る貴様に、そんなことは決して無理だ」

「どちらが『騙り』か、すぐにわかるうて」

「いかにも。すぐに、わかる」

マトスは、祭壇に体を向けた。そして、蛇神への呪文を再開した。

「ウォン・ティ・エトウ・エミット・イルフ・レヴォ・ナイルハディオ！」

しかし、大蛇も——トリアンダの姉も、身じろぎ一つしなかった。

長衣を翻し、マトスがフソリテスに向き直った。

「なぜ、《大くちなわ様》は目覚めん？ もう七つの心の臓は手に入れたはず」

「それがわからぬとは、やはり、騙りは騙り」

マトスの表情が怒りにゆがんだ。唐突に、近くの兵から剣をもぎ取ると、フソリテスの首に切っ先を突きつけた。

「教えろ！ すべての呪文は試した！ 何が足りん？ 何をすれば、目覚める？」

「ほう、今度は助けを求めるか、騙りの《聖蛇師》よ。たとえ首を刎ねられようと、貴様に教えるはずがなからう」

マトスは、隣のドウィータの首に切っ先を押しつけた。

「ならば、この娘の首を刎ねよう。殺すには惜しいが、やむを得ん」

フソリテスの顔にも狼狽のいろが走った。

私も、この岩陰から飛び出したかった。しかし、遠すぎて間に合うはずがない。剣の柄を握る手に力が入った。

しかし、ドウィータは言った。

「フソリテス様、大蛇の秘密を守るためなら、喜んで首を差し出します」

「ほう、見事な心がけ」

マトスは、聖人らしからぬ嫌らしい笑みを浮かべ、ドウィータを見下ろした。そして、剣を構えた。が、次の瞬間、ワドワクスが兵を振り払い、ドウィータの前に転がり出た。仰向けに倒れたまま、彼は叫んだ。

「駄目だ！ 殺すなら、僕を殺せ！ 血に飢えた詐欺師よ！」

マトスの顔に勝ち誇った笑いが浮かんだ。

「これはこれは美しい自己犠牲か。ならば、そなたの願い、かなえてくれよう」

マトスが剣を振り上げた。

「ワドワクス！」

ドウィータが叫ぶのとほぼ同時だった——剣が振り下ろされた。

その切っ先が貫いたのは、フソリテスの胸だった。

愕然とした表情で、マトスは剣から手を離し、後ずさった。

「フソリテス様！」

ドウィータがフソリテスににじり寄った。が、兵士に捕まり、引き戻された。

「あ、あ、あ、兄者……」

マトスの両眼に、恐怖と絶望の色があふれた。

フソリテスは、胸に剣を突き立てたまま、穏やかな笑みを浮かべていた。

「マトス……やはり、そなたは未熟だ……いつまでたつても」

「お、教える……教えるんだ！ どうすれば良い？」

いつの間にか、マトスの声色は卑屈になっていた。

「マトスよ、真の名を知らねば……〈よりしろ抛代〉は、答えてはくれぬ……」

「真の名？ 何だ、それは？ 教えろ！ 教えてくれ……！」

「わしを、ほんとうの『兄』と思うのであれば……〈大くちなわ様大くちなわ様〉は……レグドラ
ンへお送りせねばならぬ。真の名は……」

フソリテスの声がかすれた。マトスは、その顔を兄に近づけた。

「何だ？ 真の名とは……？」

マトスは懇願するように言った。

「真の名は……そなたにだけは、教えられん！」

うめくように言うと、フソリテスは、自ら両手で胸に突き立った剣の刃を掴んだ。

一気に剣を柄まで胸に突き通した。貫通した切っ先が背中から突き出した。

「フソリテス様！」

ドウィータとワドワクスが、同時に叫んだ。

フソリテスは体をくの字にねじ曲げ、そのまま横に倒れた。

フソリテスは、大蛇の祭壇を凝視したまま、動かなくなった。

真の〈聖蛇師〉は、死んだ。

そのときだった。マトスが地面にひざまずいた。言葉にならぬ悲鳴を上げ、拳で地面を何度も叩いた。

彼を取り囲む兵士たちも、その他の者たちも、誰一人動かなかった。

また一つ、失われるべきでない命が、失われた。

全身のあらゆる場所が痛んだ。

左肩を掴んだ。傷口を見る。またリリローの青い花が、血を吸って黒く染まっていた。

その刹那——様々な光景が脳裏を駆け巡った。フィエル。リリロー。ノーア。サンナ村。フピース。ガラミの術——

まさか、と思った。

祭壇の上の大蛇。目蓋のない、濡れた眼。

そのときに、私は確信した。大蛇は、すでに目覚めている。そして、我々の行ないの一部始終を見つめている。

剣を抜いた。それを左手に持ち替えると、右手で弩弓を掴んだ。

トレアンダも、慌てて真似をして彼の短剣を抜いた。

岩陰に隠れながら、一気に祭壇へと走った。誰も、私たちに気づいてはいない。いや、大蛇だけは気づいているかも知れない。

マトスは、いまだに地面にうづくまり、拳を地面に叩き付けている。それは怒りなのか、絶望なのか、あるいは実の兄を殺してしまった悔恨なのか。

祭壇の後ろに回った。

フソリテスたちを進行してきた兵士が、私たちに気づいた。彼らは一斉に槍を構えた。

右手で弩弓を構え、引き金を引いた。一人が倒れた。すぐさま二の矢をつがえ、放つ。二人目が悲鳴も上げずに息絶えた。三本目の矢をつがえる時間がない。弩弓を捨てた。

飛びかかった。兵の胴を薙いだ。トレアンダも短剣を持って、兵の背中に突っ込んだ。その場にいる者たちが異変に気づく前に、私は一気に三人を斬り捨てていた。私の剣の刃は、鋼の鎧すら断ち切っていた。トレアンダも、背後から一人の兵を短剣で突き殺したようだった。

私は祭壇を回り込んだ。マトスの長衣を掴む。全力で引き寄せ、剣を喉に突きつけた。

「お、おのれ……ゴルカン……！」

後ろに控えていた五十名あまりの兵士たちが、一斉に武器を構えて祭壇を取り囲んだ。

トレアンダは、姉のもとへ駆け寄った。

「姉ちゃん！ 助けに来たよ！ 眼を覚まして！」

しかし、トレアンダの姉は、祭壇の前で、じつと凍り付いたように立ち尽くしていた。

私は、ドウィータとワドワクスの背後の兵に怒鳴った。

「二人の枷をはずせ。さもなくば、この男の首は胴体から離れることになる」

兵士は、不承不承、二人の手枷を外した。

ドウィータはすかさず、その兵士の槍をもぎ取った。ワドワクスも、彼女にならう。

トレアンダが不安そうな顔を私に向けた。

「ゴルカンさん……お姉ちゃん、目覚めない。どうしよう」

すると、吐き捨てるようにマトスが言った。

「それ故に、その娘はよりしろ〈抛代〉なのだ。すべては、終わったのだ。〈聖蛇師〉がいなければ、もう大蛇など、用なしだ。ただの馬鹿でかい蛇に過ぎん」

そしてマトスは大声で笑い出した。

〈聖蛇師〉とは大蛇の真の名を受け継ぐ者とフソリテスは言っていた。そして、大蛇が地上に災厄をもたらさないよう、見守る者。フソリテスは命を落とした。しかし――

大きな賭だった。そしてそれは、あまりにも、私に不利な賭だった。

私は剣の柄でマトスの後頭部を殴りつけた。マトスはうめくこともせず、気を失って地面にうつ伏せに倒れた。

私は、ゆつくりとトレアンダの姉の前へ行った。トレアンダが不安そうな眼で見上げてくる。私は微笑んだ。が、その笑みはきつとこわばっていたことだろう――これからやろうとする大それた試みを前にして。

私は大きく息を吸った。

何日前のことだったろう。フピースは言った。

――大くちなわが、南へ飛ぶ。

その前に、フピースは確かに、ある言葉を告げた。

「リヴァーシ」

私はトレアンダの姉に――そして大蛇自身に――呼びかけた。

「リヴァーシよ。あなたはずっと目覚めていた。そして、我々の愚かしい所業をずっと見ていた。そうですね？」

沈黙――

やはり、賭には負けたのか。

そのときだった。

トレアンダの姉が口を開いた。

「今、わたしは〈聖蛇師〉が無惨に命を落とす様を見た。おまえは〈聖蛇師〉ではない。なぜ、わたしの名を知っている？」

少女の口から、まぎれもなく大蛇――リヴァーシの言葉が発せられていた。

いつの間にか、音もなくリヴァーシはその鎌首をもたげていた。その高さは、三メートル（約十メートル）にも達しているだろう。そこから、彼女――大蛇リヴァーシは、じつと私を見下ろしていた。その口からは、ちろちろと青い舌が出ている。

神殿全体にいる者たちから、どよめきの声が上がった。

「いかにも、私は〈聖蛇師〉ではありません。しかし、ひよんなことからあなたのお

名前を知ることとなりました。もつとも、あなたがお答えになるまで、それがあなたの名だと確信はできなかったのですが」

トレアンダの姉——大蛇リヴァーシは笑った。

「わたしを御影石の祠から目覚めさせたのは、おまえか？」

「いいえ。ある少年が、あなたを目覚めさせようと思いました。あなたは半ば眠っていたので、覚えておいででないかも知れない。しかし、すでに六つの心の臓を手に入れ、そして彼の目覚めのエ・カーワの術をかけられたあなたは、祠の中で眼を覚ました。きつとまだその頃は、真の姿になつていなかったことでしょう。七つ目の心の臓を手に入れたのは、おそらくまったくの偶然です。哀しい偶然です。ある少女が一人でやって来たのです。まだ真の姿になつていなかったあなたは、祠の祈り口から飛び出すことができた。あなたは本能の命ずるまま、彼女の心の臓を手に入れた……」

「そう……よくは覚えておらぬが……確かに、わたしは乙女の心の臓を喰らったのだらう。だから、今ここにおるのであらう。つまり……わたしのために、咎なき七人の乙女が犠牲になった……そう申すのだな？」

「そうです。あなたの力を悪用しようと思んだ者たちが——ここにいるマトスとその手下たちが——子どもたちの命を奪ったのです」

そこに割り込む声があった。

「しかし、七人目のティマーだけは、あなた自身が殺した！」

ワドワクスだった。彼はまっすぐに大蛇の眼を直視していた。

リヴァーシとトレアンダの姉がワドワクスに顔を向けた。じつと彼の姿を見つめる。

しばし沈黙が下りた。

「ならば……わたしの罪は重いな」

トレアンダの姉は静かに言った。

ワドワクスは勢い込んで言った。

「そう、僕は、あなたに心の臓を抜かれたティマーの亡骸をこの眼で見ました。そのときに感じた怒りは、今でも消えたわけじゃない……！」

身を乗り出そうとするワドワクスの肩に、ドウィータが歩み寄り、そつと手を置いた。そしてドウィータは、意を決したように、リヴァーシの鎌首を見上げた。彼女は、冷静な口調で言った。

「その罪を責めることが、誰にできましょう。神——そして神の僕を裁くことは、人には許されていませんから。しかし、神ならば人を殺してもよいのでしょうか？」
「難しいことを問う。そなたはどう思う？」

トレアンダの姉——リヴァーシは静かな声で尋ねた。

「わたしにはわかりません。わたしは、神ではありませんから。そして、神でなくてよかった、と思っています」

ドウィータはリヴァーシの顔を真正面から見据え、答えた。

トレアンダの姉は、嘆息するような声を漏らした。

「ならば、わたしはとこしえにその罪を背負わねばならぬな」

「そのお言葉を聞き、少しは心が晴れました」

ドウィータが言った。

トレアンダの姉とリヴァーシは同時に、私のほうへ顔を向けた。

「わたしを目覚めさせようとした少年がいると申したな。その者はどうしたのだ？」

「……彼の姿は、ここにはありません。どこにいるかもわかりません。リヴァーシよ、あなたはご存じありませんか？」

「残念ながら、〈灰色の右手〉よ、わたしにもわからぬことはある」

私は胸を衝かれた。

「なぜ、私のことを？」

再びリヴァーシは笑った。

「我が名を知っていないながら、おのれのことを知らぬとは。〈灰色の右手〉、何が望みだ？」

私はリヴァーシをじつと見返した。

「リヴァーシよ。あなたこそ、望みは何ですか？」

リヴァーシの表情は変わらなかつたが、トレアンダの姉は、明らかに胸を衝かれたような表情になった。

「何と申した？ わたしの望み……？ おまえは……不思議なことを言う……」

私は、トレアンダの姉の肩に手を置いた。

「あなたのお仲間……生みの親も、北方の鑛峰山脈やじりみねの彼方、『悪魔の地』という異名を持つレグドランにおられます。あなたは一人、彼らから引き離され、言わば人質の身として、祠で眠ることを余儀なくされた。しかし——」

「何が言いたい？」

「しかし、あなたは自由だ。あなたはもう、囚われの身ではない。その翼で、レグドランへ行くのです。この地を去るのです。それが、ティマーへの償いでもあります」と、そのときだった。強い力で唐突に背後から突き倒された。私は剣を取り落とした。いつの間にか、マトスが短剣を構えて、私の上に馬乗りになっていた。

「そんな馬鹿なことをさせてなるものか！　みな者、この流れ者の戯言を信じるな！　私こそが、真の〈聖蛇師〉！　地上界を統べる者！」

マトスの短剣の切っ先が、私の喉に食い込んだ。マトスが勝ち誇った顔で私を見下ろした。マトスは私の顔に唾を吐きかけた。

マトスは顔を上げ、大蛇に手を差し延べ、怒鳴った。

「リヴァーシよ！　私が〈聖蛇師〉だ。おまえは〈聖蛇師〉に従わねばならん！　それが、十二賢者と蛇神へクロンとの契約。私の知恵、おまえの力、それがあれば、全地上界をひざまずかせることなどたやすい。さあ、力を貸すのだ！」

唐突に、甲高い笑い声が神殿全体に響き渡った。それは、もはやトレアンダの姉ではなく、リヴァーシ自身の口から発せられていた。

「面白い。おまえは、なんと面白いことを言うのだろう」

マトスの顔に満面の狂喜が広がった。

リヴァーシは、その鎌首を高々と持ち上げ、火口全体をゆつくりと見回した。集まる人々や兵、さらにアグロウたちの口から、畏怖のあえぎ声のようなものが漏れた。

「よかろう。ここに集う者どもよ！　この〈聖蛇師〉とやらの言葉を信ずるならば、我が真の力を、しかとその眼を見開き、脳裏に焼き付けよ！」

そしてリヴァーシは、同時に私とワドワクス、ドウィータのほうを向いた。

「そして、信じぬ者たちよ。しっかりとその目蓋を閉じ、決して何も見てはならん」
しばし、私とリヴァーシの眼が合った。リヴァーシは、うなずいたように見えた。マトスは私から離れ、ぎらぎらと眼を輝かせ、祭壇の上のリヴァーシへ歩み寄った。

「おお、リヴァーシよ！　見せてくれ、そなたの真の力を！」

リヴァーシは、口を大きく開いた。青い舌と真っ白な尖った歯がくつきりと見える。そして、リヴァーシは大きく息を吸い込んだ。

と、トレアンダの姉が、呪縛から解かれたかのように、地面にくずおれた。

「姉ちゃん！」

トレアンダが叫び、姉を抱き起こした。

私は叫んだ。

「眼を閉じろ！」

その声が、ドウィータとワドワクスに届いたかどうか、わからなかった。私は跳躍した。トレアンダとその姉の上に覆い被さった。二人を力の限りに抱きしめた。そして、しっかりと眼を閉じた。

リヴァーシが、咆哮した。

「蛇神覚醒」第八話へつづく